

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所（1932～1938年）： 技術史分野を中心に
Author(s)	市川, 浩
Citation	社会文化論集, 16 : 1 - 31
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/49755">10.15027/49755</a>
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049755">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049755</a>
Right	Copyright (c) 2020 『社会文化論集』編集委員会
Relation	



## ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所 (1932~1938年) ——技術史分野を中心に——

市 川 浩

### はじめに

2005年、当時、ロシア科学アカデミー・セルゲイ・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所の技術史部副部長であったオクサーナ・シモネンコ (Оксана Даниловна Симоненко) は、その著書のなかで「技術のマルクス主義的概念の修得にもっとも関連性が強い哲学的諸問題に取り組んだのは、Kh.I.ガルベルであった<sup>1)</sup>」と評している。しかしながら、わが国のマルクス主義技術史・技術論に関連した同時代の文献のなかにハイム・ヨシフォヴィチ・ガルベル (Хаим Иосифович Гарбер. 1903~1937年) の名前を見いだすことはできない<sup>2)</sup>。また、1930年代、量子力学や相対性理論の哲学的解釈に尽力したとされるセルゲイ・ヴァシーリエフ (Сергей Фёдорович Васильев. 1898-1937) の名前がわが国で論じられることもなかった<sup>3)</sup>。ガルベルもヴァシーリエフらも、同じ研究機関、レニングラード (現、サンクト=ペテルブルク) に立地していたソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所 (以下、研究所と略記) を舞台にそれぞれ活発な論述活動を展開していた。しかし、行論中に示すように、この研究所は1932年3月28日のソ連邦科学アカデミー総会で設立が承認されたものの、わずか6年後の1938年、3月5日付科学アカデミー幹部会布告により閉鎖されている。しかも、1936年夏に研究所がモスクワに移転したあと、この研究所は大きくその規模を大幅に縮小した。ガルベルとヴァシーリエフはともにその少し前、4月に逮捕されている。「事実上」という副詞を添えると、この研究所は1936年の夏、すわなち、設立からわずか4年数カ月で活動を停止していたことになる。

この研究所の設立70周年を記念して、ロシア科学アカデミー・セルゲイ・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所（1953年、本稿が対象とする科学史=技術史研究所とは別の、まったく新しい研究所として設立された）の雑誌、『自然科学史=技術史の諸問題（«Вопросы истории естествознания и техники»）』誌にアレクサンドル・ドミートリエフ（Александр Николаевич Дмитриев）<sup>4)</sup>、ユーリー・クリヴォノソフ（Юрий Иванович Кривоносов）<sup>5)</sup> 両氏の論文が掲載され、ようやくその全体像が可視化されるようになった。ドミートリエフはその詳細を極めた論稿において、この研究所の研究者、その周囲の人々、総計50名近い人物を（そのうちかなりの人数をフルネーム・生没年付きで）紹介し、この研究所がどのような集団に担われていたのかを明らかにした。また、クリヴォノソフ論文は、初代所長ニコライ・ブハーリン（Николай Иванович Бухарин. 1888-1938）、副所長アブラム・デボーリン（Абрам Моисеевич Деборин. 1881-1963）など、この研究所に指導的立場でかかわった人物のソヴィエト政治史における過酷な運命を軸に、研究所の、いわば“政治史”を扱っている。これらのほか、シモネンコは先に掲げた著書の、技術史のヒストリオグラフィー全般を扱った章でこの研究所の技術史分野における活動をごく簡単に紹介している<sup>6)</sup>。コンスタンチン・トミーリン（Константин Александрович Томилин）はソ連の大物理学者セルゲイ・ヴァヴィーロフ（Сергей Иванович Вавилов. 1891-1951）の科学史研究との関わりを述べる文脈でこの研究所に言及している<sup>7)</sup>（シモネンコ、トミーリン両氏の論稿は日本語で参照できる）。ここではおもに、ドミートリエフ、クリヴォノソフ両氏の論文に学びつつ、研究所の初代学術書記（研究所の日常的運営に責任をもつ役職。事務部門を統轄する）であったマトヴェイ・グコーフスキー（Матвей Александрович Гуковский. 1898-1971）の手になる同時代における研究所活動報告や主要な会合や人物に関する文書館資料を活用して、この日本人にとってはほとんど知られていない、より正確に言えば歴史から抹殺された研究所の概要を提示することとしたい。そ

の際、この研究所を構成した諸分野のなかでもっとも活発に活動し、本稿で大きな論点となる科学史・技術史の“マルクス主義化”がもっとも鮮明に現れた技術史の分野に焦点をあててみたい。

## I. ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所の設立の経緯と最初期の活動

1929年、全連邦共産党（ボ）政治局員ニコライ・ブハーリンは、ヨシフ・スターリン（Иосиф Виссарионович Сталин. 1878-1953）と対立し、失脚した<sup>8)</sup>。その後は、その該博な知識と豊かな見識を基礎に、一学究（科学アカデミー会員。歴史学・経済学）、あるいはジャーナリスト（連邦政府機関紙『イズヴェスチヤ-Известия-』の編集長など）として活動するはずであった。彼の科学史・技術史にたいする関心は広く知られているが、高名な地球化学者・科学思想家のヴラジーミル・ヴェルナツキー（Владимир Иванович Вернадский. 1863-1945）が1921年に創設しながらも不活発だった「知識史委員会」を1930年10月3日付けで引き継ぐことになる<sup>9)</sup>。

「知識史委員会」は1921年設立されたものの、ヴェルナツキーの逮捕やその一時的な海外移住のために、1926年によく活動を開始している<sup>10)</sup>。しかし、その運営は無計画で、あれこれの報告を聞く会合をときおり開くものの、報告の多くが科学者の伝記的紹介にとどまっていた。しかし、出版事業は活発で、モノグラフィーのシリーズ出版物である『知識史委員会彙報（«Труды Комиссии по истории знания»）』と個別科学（者）をテーマとする『概要（«Очерки»）』シリーズがあった。『彙報』にはヴェルナツキーの『知識史の現代的意義に関する考察』（1927年）など11冊、『概要』シリーズは全部で8冊刊行された。『アイザック・ニュートン』（1927年）、『ニコライ・カステリン（Н.П. Кастерин）』（1927年）、『マルセラン・ベルテロ』（1927年）、『ウィリアム・トムソン』（1928年）、『アレクサンドル・ブートレロフ（А.М. Бутлеров）』（1929年）、『アレクサンドル・ラッポ=ダニレフスキー（А.С. Лаппо-Данилевский）』（1929年）、『レフ・シュテルン

ベルク（Л.Я. Штернберг）』（1930年）、『アレクセイ・シャフマートフ（А.А. Шахматов）』（1930年）の8冊（最後の3名は人文系の学者）がそれである。しかし、独自の定員、面積、図書室がなく、そのため、その活動の全面的な展開にはおのずと制約があった。1930年末にブハーリンが議長に就任すると、彼はこの委員会の活動を次の5つの方向性に沿って、全面的に再編しようとした。すなわち、①マルクスとレーニンの方法論の基礎の上での全時代、全世界の国々の科学史の計画的研究、②従来は委員会の活動のなかにまったく位置づけられなかった技術史の枠組みと方法論に関する計画的研究、③まずは科学アカデミーの他の研究所、さらにはアカデミー外の研究所が実践的に取り組んでいる諸問題の歴史の研究、④委員会に附属した科学史=技術史博物館、すなわち、一方では委員会の学術活動のための研究室となり、他方ではその活動をポピュライズし、広範な大衆にその成果を示す博物館の創設、⑤委員会の科学活動の道具立てとなる図書館、図書=地図館の創設、である。1931年中は、人員（全員兼業であるが）の選定とグルーピング、および図書館の整備に当てられた。図書館は、科学アカデミー中央図書館の所蔵文献を分割して図書館とし、これに加えてヴェルナツキーの個人蔵書を保管する特別のキャビネットを整備した。また、博物館用の記念品の収集のため、レニングラード・ソヴィエトは工場などへ、由緒ある物品の廃棄を禁じる措置を公布した<sup>11)</sup>。さらに、ブハーリンはソ連における科学史・技術史の研究活動を国際的な研究連絡網にリンクさせることにも腐心し、第2回科学史国際会議（ロンドン）にボリス・ゲッセン（Борис Михайлович Гессен. 1893-1936）ら計7名を引率している<sup>12)</sup>。そして、1932年3月28日、科学アカデミー一定例総会で「知識史委員会」を基盤に、レニングラードにソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所を設立することが決まり、ブハーリンは所長に任命された<sup>13)</sup>。

しかし、ブハーリンは『イズヴェスチヤ』の編集など、モスクワにも多くの仕事を有しており、研究所の指導にそれほど精力を傾注することはできなかった。のち、この研究所が“反革命=トロツキスト組織”の“巣窟”

として指弾されたとき、党中央委員会の担当課長であったカルル・バウマン（Карл Янович Бауман. 1892-1937）はブハーリンを弁護するため、彼はこの研究所をコントロールできていなかったと申し立てている<sup>14</sup>。副所長アブラム・デボーリンは、1929年12月、“首領”スターリンを“思想家”、“哲学者”として賛美することを拒否したことを契機に、その“メンシェヴィキ化する観念論（меньшевистствующий идеализм）”を党中央から糾弾されるようになった。彼はカール・マルクス=フリードリヒ・エンゲルス研究所長をはじめさまざまな要職を追われた。1931年12月には“自己批判”を表明したとはいえ、全面的な復活はならず、科学史=技術史研究所の副所長というポストはブハーリンの所長職ともども、左遷ポストにはかならなかった<sup>15</sup>。そのデボーリンもいくつかの出版・編集事業に携わるため、モスクワを拠点としており、日常的に研究所を指導することはできなかった<sup>16</sup>。研究所発足最初期にあつて、この研究員の人選にあたり、その陣容を固めるのにもっとも功績があつたのは、「知識史委員会」最後の学術書記にして、研究所初代学術書記のグコーフスキーであつた<sup>17</sup>。エンジニアの家に生まれ、ペトログラード（レニングラード）大学歴史学部で学んだ彼は、科学アカデミー附属図書館勤務を経て、この研究所に招聘された<sup>18</sup>。彼は、ペトログラード大学の中世文化史の大家、イヴァン・グレヴス（Иван Михайлович Гревс. 1860-1941）の門下生として、師グレヴスの人脈などを頼りに、古典古代哲学史の傑出した研究者、ソロモン・ルーリエ（Соломон Яковлевич Лурье. 1890-1964）をはじめ、おもに伝統的な文化史分野の研究者をこの研究所に集めた。こうした集団に、ガルベル、ヴァシーリエフをはじめとする活動家上がりの党員研究者が加わる<sup>19</sup>。さて、この研究所の“研究員”であるが、最後の段階まで、契約にもとづいて研究所の業務に参画する兼職者が多く、正規の所員と非常勤所員との区別はあいまいであつた<sup>20</sup>。1928年に発動され、帝政ロシアで養成された専門家の大量排除をともなつた「文化革命」<sup>21</sup>、同年10月、ドンバス地方で発生した“ブルジョア専門家”による“反革命サボタージュ事件”，いわゆる

「シャフトイ事件」<sup>22)</sup>，その翌年にはじまる科学アカデミー系研究機関で研究活動をおこなっていた研究者の大量逮捕（いわゆる「アカデミー事件」）の直後<sup>23)</sup>であったことを考えると，研究所のこうした構成はたいへん興味深い。

研究所は6つのセクションから成っていた。技術史セクションは高名な電気工学者ヴラジーミル・ミトケーヴィチ（Владимир Фёдорович Миткевич. 1872-1951）を長に，研究所全体の設置に先立って1932年1月に発足，1932年には計15回もの全体集会を開催している。化学史セクションはあまり活発ではなく，全体集会は2回の開催にとどまっている。物理学=数学史セクションは，傑出した物理学者で科学のオーガナイザーとしても優れた手腕を持ち，のち科学アカデミー総裁となるセルゲイ・ヴァヴィーロフを長に1932年5月に発足，全体集会は4回開催している。生物学史セクションは高名な生物学者=植生学者で，ソヴィエト政権と良好な関係を築いていたボリス・ケレル（Борис Александрович Келлер. 1874-1945）を長に，やや遅れて1932年11月に発足し，全体集会を4回開催している。農業史セクションはソ連を代表する植物学者・遺伝学者で，のちサラトフ監獄において非業の死を遂げるニコライ・ヴァヴィーロフ（Николай Иванович Вавилов. 1887-1943）<sup>24)</sup>を長に1932年3月発足，全体集会は8回開催している。科学アカデミー史セクションは高名な東洋学者で帝政末期からの科学アカデミー終身書記，二月革命後には一時臨時政府国民教育相を努めたセルゲイ・オリデンプルク（Сергей Фёдорович Ольденбург. 1863-1934）を長に1932年5月に発足し，全体集会は4回開催した。ヴァヴィーロフ兄弟を除くと，各セクションの長はいずれも高名ではあるが，すでに第一線を退いた老科学者であり，たぶんに名誉職的な人事配置であった<sup>25)</sup>。そのため，たとえば，技術史セクションでは，ブハーリンその人がイニシアティヴを執り<sup>26)</sup>，のちガルベルがセクションの活動を差配することになる。

博物館のために，ペトロフスク・ギャラリー，軍事技術博物館，モロト

フ名称コンビナート，通信手段博物館などからコレクションを移動し，博物館立地地点が決まるまでの間，エネルギー学研究所に場所を借りて一時保管してもらうことにした。国際技術史委員会とコンタクトを回復したほか，ソ連国内におけるゲーテ没後100年（3月30日），ダーウィン没後50年（4月27日），マルクス没後50年（1933年3月14日）の各記念行事に参画している<sup>27)</sup>。

『研究所彙報（«Труды Института»）』はおのおの独立した冊子体で刊行された。技術史セクションからはチェルヌイシヨフ（Александр Алексеевич Чернышёв. 1882-1940）『高压送電の歴史に寄せて』，アレクサンドル・ラーツィク（Александр Александрович Радциг. 1869-1941）『蒸気タービンの歴史』，同『ヴィクトル・キルピチヨフ（Виктор Львович Кирпичёв. 1845-1913）の業績に関する科学史・技術史資料』など15冊刊行されている。化学史セクションは3冊，農業史セクションは9冊で，物理学=数学史セクションはザハール・ツェイトリン（Захар Аронович Цейтлин. 1898-没年不詳）『ファラデーの物理学的・哲学的見解』など5冊，生物学史セクションはボリス・ケレル『植物学の歴史研究の方法に寄せて』など2冊，科学アカデミー史セクションは3冊を刊行した。記念学術会議についていえば，ファラデー電磁誘導法則発見100周年記念学術会議，メンデレーエフ没後25周年記念学術会議などに参画した<sup>28)</sup>。

## II. 研究活動の展開

### (1) 1933年

1933年，財政上の制約から，物理学=数学史セクション，生物学史セクション，化学史セクションの3セクションが科学史セクションひとつに統合され，研究所は公式には，技術史，科学史，農業史，科学アカデミー史の諸セクションに図書=文献室と博物館の6つの部門から構成されることになったが，実際には科学史セクションの研究者は従来どおり3つのセクションに分かれて活動を展開している。技術史セクションでは，引き続

き、傘下研究者による単著の出版があいつづいた。グコーフスキー『14～17世紀イタリアにおける金属加工工作機械』、ヤーコヴ・ローカフ（Яков Анагольевич Роках. 1899-? 没年不詳）『メリヤス紡績の第一歩』、同『ロシアにおける農業機械製作業の形成に関する問題に寄せて』、エフゲニー・ツェイトリン（Евгений Александрович Цейтлин. 1907-? 没年不詳）『ロシアにおける麻機械紡績のはじまり』、同『アレクサンドロフスコエ・マニユファクチュアとロシアにおける産業革命』など14編が出版されている<sup>29)</sup>。このセクションはその一大事業として『技術史全史』全10巻の編纂をこの年あたりから本格化しているが、これについてはあとで述べる。

ほかに、所内で頻繁に講演会を催している。死後その“マルクス主義的”言語理論をスターリンその人によって批判されることになるが、当時はたいへん影響力のあった東洋学者=言語学者ニコライ・マル（Николай Яковлевич Марр. 1865-1934）<sup>30)</sup>による「技術用語への研究アプローチ」、ミトケーヴィチの「技術用語の意義」、高名な機械工学者ミハイル・シャテレーン（Михаил Андреевич Шателен. 1866-1957）の「電気機械用語の分野における国際的な活動」、同「アレクサンドル・ロドイギン（Александр Николаевич Лодыгин. 1847-1923）の生涯と創造」、ラーツィク「ディーゼル製造の歴史」など、計19回開催された。1933年後半になると、講演会開催は下火になり、『技術史全史』編纂にむけた討議が技術史セクションの主要な活動となった。

物理学史=数学史セクションでは、セルゲイ・ヴァヴィーロフが指導力を発揮し、レフ・ポラック（Лев Соломонович Полак —しばしばПоллакと表記されている—。1908～没年不詳）ら若手の活躍もめざましかった。ヴァヴィーロフ『オイラーの光学』、アレクセイ・クリロフ（Алексей Николаевич Крылов. 1863-1945）『レオンハルト・オイラー』、同『月の動きに関するオイラーの理論』、グコーフスキー『レオナルド・ダ・ヴィンチの力学』、ルーリエ『カヴァリエッリにおける極小の算出』、同『オイラーにおける極小の算出』、マルク・ヴィゴツキー（Марк Яковлевич

Выгодский. 1898-1965) 『ガリレオとその宗教裁判プロセス』, 同『ケプラーの数学』, ザハール・ツェイトリン『ガリレオと力学の発展』, ボラック『デカルトの力学』など15篇の成果が出版されている。また, このセクションでは, より自由な活動として, 新進気鋭の物理学者(湯川中間子理論導出につながる核力の実測に取り組んだ)ドミートリー・イヴァネンコ(Дмитрий Дмитриевич Иваненко. 1904-1994)を招いて, 「量子力学の発展」と題する講演会を開催するなど, 全部で講演会を4回開催している<sup>31)</sup>。

農業史セクションでは, ナターリヤ・フリットネル(Наталья Давидовна Флиттнер. 1879-1957)『古代エジプトの農業』など, 5篇の労作が刊行されている。その他, 畜産に関する著作が3篇出版され, 研究所メンバー以外の講師による講演会が4回開催されている。科学アカデミー史については, 4篇の研究成果が出版されたほか, 外国の文献からの研究も進んだ<sup>32)</sup>。

このほか, 研究所全体として, レオンハルト・オイラー記念学術集会, カスパー・ヴォルフ記念集会が開催されている。また, 国際的な連携について見れば, この年, この研究所は, パリの国際科学史委員会, ロンドン科学博物館附属ニューコメン協会, 設立されたばかりのウィーン技術史研究所, ミュンヘン・ドイツ博物館とコンタクトを執ることに成功している<sup>33)</sup>。

ここで注目すべきは, この段階から, 科学史・技術史のいわば“マルクス主義化”が強く意識されるようになったことである。グコーフスキーは, 「ここでの基本的な強調点は, オリジナルなテキストの独自の深い研究, ブルジョワ科学史が与えるまったく虚偽の理解を破壊し, 予備的なものであれ, 研究対象となる歴史的な時期の社会-経済的な諸現象と科学的な諸現象との間の関連を明らかにし, 最終的には当該科学の基本的な法則的発展の発現にいたることをする目的をもつ研究に置かれている」<sup>34)</sup>と述べ, 科学史・技術史研究の“マルクス主義化”を方向性として掲げているが, ドミートリエフによれば, ここでの“マルクス主義化”は圧迫や強制を伴うものではなく, 視野を広げるものとして広範な非マルクス主義的研究者

にもむしろ歓迎されていたようである<sup>35)</sup>。

## (2) 1934年

ここでもグコーフスキーは、「ブルジョワ技術史、および、とりわけ科学史は、モノグラフィーでも、共著でも、かなりの多数の研究に満ちているが、しかしこれらの研究のすべては、例外なく、第一に、まったく欠陥のある、満足できない分析、すなわち、あれこれの科学と技術の分野の、それらを実現させ、それらの社会的環境を規定する諸関連の外におかれた、いわば“自己展開”の分析、ふたつ目には、通常それらは、多くの場合、ソヴィエトの読者にとってまったく受け入れがたいテクノクラートの、あるいは逆にテクノフォビア的な立場から書かれているのである」<sup>36)</sup>と述べているが、この時期、“ブルジョア技術史”，“ブルジョア科学史”を含む外国文献が次々と翻訳・刊行されていることに注目したい。ヘルマン・ディールスの『古代技術』はザハール・ツェイトリンが翻訳し、出版された。フェルディナント・ローゼンベルガーの『物理学史』全3巻が1933年から1936年にかけて、レオナルド・オルシュキの3巻本『近代言語による科学文献の歴史』(1933年)、ポール・タナリーの『ヨーロッパにおける自然科学発達の歴史的概要(1300～1900年)』(1934年)、フリードリヒ・ダンネマン『自然科学史』全3巻(1932～1938年)などが続々と出版されている<sup>37)</sup>。

技術史セクションでは、グコーフスキー『15～16世紀イタリアにおける金属加工』など西洋に関するもの6篇、エフゲニー・ツェイトリン『麻紡績における産業革命』など9篇を刊行したほか、研究所外部のものによる3篇の出版を進め、18世紀の発明家イヴァン・クリビン(Иван Петрович Кулибин. 1735-1818)の業績に捧げられた論稿3篇などを出版した。こうした刊行事業と並んで、『技術史全史』の本格的な編纂がはじまった。物理学史=数学史セクションでは、ゲアハルト・ハーリヒ(Gerhard Harig: ロシア名, Гервард Эрвинович Гариг. 1902～1966年)『ジェローラモ・カ

ルダーノの力学』など7篇を刊行するほか、国立技術=理論出版社による『ニュートン著作集』編集（セルゲイ・ヴァヴィーロフが責任者）に協力した。ほかに重要な仕事として、ハーリヒの論文「ジェームズ・クラーク・マックウウェル」、同「レーニンと物理学」など4篇を挙げなければならない。生物学史セクションではエルンスト・ヘッケル生誕100周年を記念して、著名な植物学者で、ソ連邦科学アカデミー副総裁（1936-1945年には総裁）であったヴラジーミル・コマローフ（Владимир Леонтьевич Комаров. 1865-1945）の「ヘッケルと進化理論」など4篇が出版されたが、うち1篇は英語でハーマン・マラー（Hermann Joseph Muller. 1890-1964：1946年ノーベル生理学・医学賞受賞。当時、ソ連に滞在。ロシア語では、Герман Джозеф Мёллер）が書いたもので、「ヘッケルと遺伝学」と題するものであった<sup>38)</sup>。

### (3) 1935年

その前年までの年次報告のスタイルと違い、個々の研究者の業績は掲げられていない。研究所全体として、1935年中には、『科学史=技術史アーカイヴ』の第2巻、第3巻、第4巻が刊行された。また、『レオンハルト・オイラー記念論文=資料集』、ルーリエ『古代原子論者における極小の理論』、スタニスラフ・ストルミリン（Станислав Густавович Струмилин. 1877-1974）『ロシアとソ連邦における鉄鋼業』、『原典で見る電動機の歴史』、ヘルマン・ディールス『古代技術』、I. スモルゴンスキー（И.К. Сморгонский. 伝記的詳細不詳）『造船用語』を出版した<sup>39)</sup>。

ここで特筆されているのが、技術史の方法論に関するセミナーの役割である。グコーフスキーは、「…セミナーは研究員の関心を大いに惹き、セクターの全仕事の方法論的水準を少なからず高め、さらに、技術の理論に関する特別な研究テーマ、何よりマルクス主義の技術理論に関するテーマに向かわせた<sup>40)</sup>」と評価しているが、その導き手となったものとしてガルベルの「2篇の論文」（題名の明示はない）を挙げていた。これについて

は後述しよう。

### Ⅲ. 技術史分野の活動

#### (1) “物質文化史”か“技術史”か？

『科学史=技術史アーカイヴ』第2巻には研究所クロニクルはないが、当時活発だった「物質文化史」グループとの関連が述べられていて興味深い。

当時、レニングラードでは「国立物質文化史アカデミー（Государственная академия истории материальной культуры: ГАИМК）」を名乗る研究者集団が活発に活動していた。この「アカデミー」は、1859年に設立された帝室考古学委員会を母体に、革命後1919年、「ロシア物質文化史アカデミー」として再編されたものである（1926年に「国立物質文化史アカデミー」と改称）。もともと考古学分野の研究機関であったため、非文字人工遺物の研究に精通しており、非文字人工遺物の視点から、原始から現代までの人類の歩みにアプローチしようとする壮大な構想をもっていた<sup>41)</sup>。

グコーフスキーは「技術史は社会的人間の生産器官の形成史を研究し、そうして人間の自然に対する能動的な態度を明らかにする」<sup>42)</sup>と言う。そのような技術史は、“物質文化史”を代表することができるのであろうか。あるいは逆に技術史は“物質文化史”に解消できるものなのであろうか。1932年、レニングラードにあった2つのアカデミー系研究機関、すなわち、科学史=技術史研究所と「国立物質文化史アカデミー」の、とりわけ若い世代の研究者たちの間で論争、意見の不一致があった。A. スヴェトロフ（А.В. Светлов. 詳細不詳）という研究者は「物質文化史アカデミー」の『通報（«Сообщение ГАИМК» №5-6）』に掲載されたその論文「新しい段階への要員養成」のなかで、“完全に確定し、明確に定式化された”（と彼が述べている）“物質文化史”というタームを、その内容の“不明確さ”ゆえに、これをマルクス主義技術史に置き換えようとする傾向を批判した。さらに、若い歴史家イヴァン・スミルノフ（Иван Иванович Смирнов. 1909-1965）

はその論文「マルクス主義的物質文化史は可能か」のなかで同様の批判をおこない、高名な考古学者ヴラジスラフ・ラヴドニカス（Владислав Иосифович Равдоникас. 1894-1976）もその著作『マルクス主義的物質文化史のために』（1930年. もとは『通報』誌に連載されたもの：«Сообщение ГАИМК». 1932, No.1-21）のなかで論争的な論評を試みている<sup>43)</sup>。こうした「国立物質文化史アカデミー」側の技術史包摂への強い意欲の背景として、のち“ソ連を代表する”技術史家となるヴィクトル・ダニレスフスキー（Виктор Васильевич Данилевский. 1898-1960）がここに在籍していたことを考慮しなければならないかもしれない<sup>44)</sup>。この研究機関について筆者の知るところは少ない。今後の課題としたい。

研究対象の近似性（ただし、古代史にほぼ限られているが）から、科学史=技術史研究所と「国立物質文化史アカデミー」の“協働”が、当然のこととして、話題にのぼる。1933年5月22日に研究所とこのアカデミーは、デボーリンを議長とする合同の委員会を立ち上げ、共同の事業について協議している<sup>45)</sup>。しかし、“物質文化史”の潮流はさしたる展開、成果を見せることなく、やがて、もとの考古学に落ちていっていったように思われる。

「国立物質文化史アカデミー」は1943年のモスクワへの移転を経て、1959年に科学アカデミー・考古学研究所へ改称する<sup>46)</sup>。

## (2) 『技術史全史』全10巻編纂事業

ブハーリンが「知識史委員会」を研究所に改組するにあたって打ち出した5つの方向性のうち、「従来は委員会の活動のなかにまったく位置づけられなかった技術史の枠組みと方法論に関する計画的研究」<sup>47)</sup>は研究所発足当初からの相対的重点であった。そのため、彼は研究所、および周囲の研究者の総力を結集した『技術史全史』全10巻（«Всеобщая история техники» в 10тт.:原語のいささか仰々しいニュアンスを失わないよう、『技術史全史』と訳した）編纂事業を提起する。

では、この当時のソ連（帝政ロシア末期も含め）にはどのような技術史

が叙述されていたのであろうか。アレクサンドル・ラーツィクは、スイスからロシアに移住した商人の祖父を持ち、その父はモスクワ大学を卒業し、カールスルーエに留学した、当時第一級の鉄道技師で、本人もサンクト=ペテルブルクの総合技術専門学校を出たのち、ベルリン大学などに留学し、ペテルブルク（ペトログラード）大学の教授を努める高名な熱機関工学者であり、典型的な“旧専門家”，ないし“ブルジョア専門家”である。技術史にも強い関心を持ち、生涯数冊の書物を著すが、その『ジェームズ・ワットと蒸気機関の発明』<sup>48)</sup>（1924）は代表作のひとつである。この著書は人気を集めたようであるが、ワットの天才ぶりを強調する、いわゆる“天才史観”が目立つ。

研究所発足早々、所長ブハーリンはこうした“天才史観”のほか、さまざまな技術史観が混在している状況に不満を表明する。1932年5月11日の所内「技術史編纂委員会」の会合で、ブハーリンは「資本主義に関する諸章の計画のいくつかは、いくぶんか違った、技術が生産からではなく、科学の逆方向の影響から発達するといった見方に立っている。…ルィニンの論文（は）、…一方では、宗教はじめ、まったくさまざまな異種の、一元化されていない原因を擁護して、…、他方では気球飛行への階級闘争の影響を異様なほど単純化して提起している。ラーツィク教授、その他は、水平的な切り口か、垂直的な切り口か、が何よりもわれわれを悩ましていて、と問題を提起している。（が）…純粋な技術、および純粋に技術的なものの内在的論理を明らかにしようとする偏向は垂直な形の遊牧民の仮小屋の歴史を与えるだろう。歴史家は水平的な切り口にこだわってきた。…」<sup>49)</sup>と述べ、首尾一貫した技術観、すなわちマルクス主義的技術観にもとづく歴史の集大成の必要を強調する。

しかしながら、『技術史全史』全10巻編纂のために編成された“執筆者部隊”はラーツィクそのひとやセルゲイ・オリデンプルクなど、非マルクス主義的な旧専門家含んでいた。彼らはほぼ月に2回というペースで頻繁に会合をもち『技術史全史』の構想を練り上げていった<sup>50)</sup>。1933年の段階

で、早くも、第1～4巻までの構想を固めている。それによると、第1巻は序と階級以前の社会を扱い、ブハーリン（序）と高名な歴史家=考古学者ボリス・ボガエフスキー（Борис Леонидович Богаевский. 1882-1942）を中心に人類学=民俗学研究所の연구원などが執筆を担当し、第2巻は古代東方と古典古代を扱い、ルーリエや国立エルミタージュの学芸員3名などが執筆を請け負い、第3巻は西ヨーロッパとロシアにおける封建時代を対象に、モスクワでは高名な農業史の専門家エフゲニー・コスミンスキー（Евгений Алексеевич Косминский. 1886-1956）が、レニングラードでは文化史家のパーヴェル・シチョーゴレフ（Павел Павлович Щёголев. 1903-1936）が“執筆者部隊”を率い、第4巻は東方における封建時代を対象に国立エルミタージュの学芸員などが執筆にあたることになっていた。この段階ですでに最初の2巻分の仕事は完了しており、つづく2巻の作業は“進行中”であった<sup>51)</sup>。個々の執筆者のボリシェヴィキ政権へ態度はともかく、ボガエフスキーやコスミンスキーなどは帝政期に養成された“旧専門家”であり、『技術史全史』のこうした“執筆者部隊”の編成はたいへん興味深い。

雑多な技術観、技術史の方法が混在するなかで、新しい技術史の方法論を提起したのは、ハイム・ガルベルであった。彼は、1934年2月11日、研究所会合における「ガルベル教授の報告」<sup>52)</sup>、それにはじまる一連のセミナーを通じてマルクス主義技術史の方法を示した。また、1935年の『科学史・技術史アーカイヴ』第5巻には彼の論文「マルクスにおけるMaschinerieの問題」<sup>53)</sup>が掲載された。1935年4月15日の技術史セッションの会議で、ガルベルはマルクスの、いわゆる「機械論草稿」を紹介し、このコピーをブハーリンから手渡されたと証言している<sup>54)</sup>が、この論文はさらに精緻に技術史のマルクス主義にもとづく哲学的解釈を述べたものであった。グコーフスキーがこれらガルベルの業績を、マルクス主義的技術史が切り開かれるうえで画期となる業績と評価していたことはすでに述べた。

#### IV. 終焉

1936～37年にかけてピークを迎えた「粛清」の嵐（「大テロル」）は、まちがいなくスターリンその人、およびその周辺の権力者が発動したものであるが、急速に彼らのそもそもの思惑を超え、社会全体の巨大な混乱、あるいはマス・ヒステリアの様相を帯び、暴走していった<sup>55)</sup>。

この「大テロル」の波は、1936年4月、所長ブハーリンがフランスに出張しているタイミングでこの研究所にも押し寄せてきた。ガルベル、ヴァシーリエフ、ヤーコヴ・ウラノフスキー（Яков Маркович Урановский. 1896-1936）が逮捕された。ブハーリンは、高名な電気工学者、昔からの“レーニンの戦友”で、当時科学アカデミー副総裁であったグレブ・クルジジャンオフスキー（Глеб Максимилианович Кржижановский. 1872-1959）と終身書記ニコライ・ゴルブノーフ（Николай Петрович Горбунов. 1892-1938）に問い合わせと抗議の書簡を送るが、ゴルブノーフは研究所を“反革命=トロツキスト組織”の“巣窟”とする断定を繰り返すのみであった<sup>56)</sup>。ゴルブノーフはレニングラードに駆けつけ、5月23日に研究所の所員たちを集め、研究所の閉鎖を宣告するが、翌日にはその方針を撤回、研究所のモスクワへの移転を命じる<sup>57)</sup>。

モスクワ移転は「以前の集団の完全な廃止を意味した」<sup>58)</sup>。1936年9月19日付の党機関紙『プラウダ』に、この研究所の定期刊行物、『科学史=技術史アーカイヴ』について、「統一された目的も計画もなく、多くが非実践的で、必然性がない、似非科学的な論文で、マルクス主義・レーニン主義の精神での問題提起や解決を無視し、科学史、技術史の戦線におけるファシズムとの闘争をぼかすか、まったく無視しており、理論的な過ちがいっぱいある」との批判が掲載された<sup>59)</sup>。規模は大幅に縮小され、すでに決まっていた計画は過大なものとされた。以前の計画は再検討に附された<sup>60)</sup>。研究所は『技術史全史』全10巻編纂事業をはじめとする事業計画の大幅縮減を決め、研究所が属していた科学アカデミー・社会科学部の1937年2月1日の部会も、従来の計画を“誇大で非現実的な研究計画からな

る”ものとして斥け、大幅に縮減された新しい計画を認めた<sup>61)</sup>。

技術史についてみれば、この研究所とは別のもうひとつの技術史のグループが生まれていた。このグループについては別稿で論じた<sup>62)</sup>が、ここで必要なかぎり言及しておこう。ブハーリンを政治局から解任した1929年11月の党中央委員会総会は、同時に高等工業教育機関への“マルクス主義的技術史”の導入を決議していた<sup>63)</sup>。「シャフトイ事件」以降、党は“ブルジョア専門家”への警戒をさらに強め、自前の“ソヴィエト的な”技術者の養成を急務と考えたのであろう。「文化革命」が進行している時期でもあり、高等教育にも“突撃隊方式”<sup>64)</sup>が適用されようとしていた時期でもあった。ややのち、クルジジャンフスキーが議長を務めていた人民委員会議附属高等技術教育委員会に、「マルクス主義的技術史委員会」が附置され<sup>65)</sup>、クルジジャンフスキーが「わたしの代理 (мой заместитель)」<sup>66)</sup>と呼んだアナトーリー・ズヴォルィキン (Анатолий Алексеевич Зворыкин. 1901-1988) が急速に台頭してくる。彼らは、高等技術教育委員会とともに両属関係にあった共産主義アカデミー (共産主義アカデミーでは、「幹部会附属技術史セクション」を名乗ったが、メンバーはほぼ同一である) の閉鎖=科学アカデミーへの吸収を機に、ズヴォルィキンを長とする科学史=技術史研究所「モスクワ技術史部」を名乗り<sup>67)</sup>、研究所のモスクワ移転を俟って、技術史分野におけるその奪権を完了している。

ガルベルは、1936年4月30日、内務人民委員部レニングラード州管理部により逮捕。同年12月23日、最高裁判所軍事参事会で禁固10年 (公民権剥奪5年+財産没収) の判決を受けたが、1937年10月10日付内務人民委員部レニングラード州管理部“特別三役”の決定により、裁判を経ずに「刑罰の高度な措置 (Высшая мера наказания: ВМН)」となり、11月4日銃殺が執行された<sup>68)</sup>。ヴァシーリエフも同じ日に銃殺されている<sup>69)</sup>。グコーフスキーは「かなりの程度、疑わしい人物で、非ソヴィエト的な気分の持ち主」とされていた<sup>70)</sup>が、伯父が財政人民委員を努めた革命家、イシドール・グコーフスキー (Исидор Эммануилович Гуковский. 1871-1921) であった

ことも幸いして、逮捕や糾弾を免れ、戦後も国立エルミタージュの上級学芸員やレニングラード国立大学教授として活躍、天寿を全うしている<sup>71)</sup>。

1936年9月にブハーリン本人が訴追されることとなり、1937年2月27日に逮捕、1938年3月15日銃殺された<sup>72)</sup>。第2代所長となった経済学者、経済分野の政府高官にして科学アカデミー会員のヴァレンチン・オシンスキー（Валентин Валерианович Осинский—本姓Оболенский—、1887-1938）も逮捕され、1938年に殺害されている<sup>73)</sup>。両所長逮捕後の1938年1月20日、ミトケヴィチ、ヴェルナツキーなども列席して「科学史=技術史研究所に関する会合」が開催され、次の所長の人選について協議されたものの、だれも引き受け手が現れず、研究所は閉鎖のやむなきにいたり、3月5日付科学アカデミー幹部会布告をもって正式に閉鎖された<sup>74)</sup>。

物理学史の分野で健筆を振った亡命ドイツ人物理学者ハーリヒは1934年3月以来働いていたこの研究所から1936年6月7日付で解任された。彼は研究所員の眼から見た研究所移転=閉鎖の混乱ぶりを次のように証言している。解雇の時点で受けた説明から、7月1日には研究所の再編が完了し、新しい職をモスクワに移った研究所でえられることを期待していたが、7月が過ぎても、さらに研究所指導部にかかけあっても埒があかない。彼はグコーフスキーを頼って、再雇用を働きかけてもらってもいるが、首尾よくはゆかない。レニングラード時代にすでに完了した出来高払いの仕事に対する未払い分の支払いを粘り強く請求し、ようやく1,300ルーブリを手にしたただけであった<sup>75)</sup>。

## V. むすび

過酷なソ連の政治史の渦中であって、本稿の検討対象となったソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所はわずか6年間、実質4年と3か月ほどでその姿を消した。本稿では、この研究所の設立の経緯、事業計画とその進展、そして不幸なその終焉の過程を辿ってみた。しかし、この4年数か月でこの研究所とその研究者たちはじつに実り多い研究活動を展開し

た。個々のページ数はともかく、単著を100冊は刊行しているであろうし、分厚い定期刊行物『科学史=技術史アーカイブ』は9冊刊行されている<sup>76)</sup>。

ここで簡単に研究所がもっていた方向性を外形的にだけでも特徴付けておこう。この研究所最大の事業計画は、なにより、『技術史全史』全10巻の編纂事業であった。所長ブハーリン、技術史分野の実質的なリーダーであったガルベルらは、非マルクス主義に立つ先行研究、“ブルジョア専門家”、“旧専門家”をも尊重し、それらとの協働により包括的な出版事業をめざしていた。そのため、会議を重ね、粘り強く合意を形成しようとしていた。ここでは、マルクス主義の側からする批判は（しばしばソ連史に見られるような）“打倒”を意味しなかった。1933年3月20日、研究所で開かれた、オリデンプルクを議長とする技術史委員会の会議において、この研究所で研究者として養成されたヤーコフ・ローカフが「わたしは本日の会議の主要な意義は、ここでわたしたちが何か共通のことばを作り上げたことにあると思います<sup>77)</sup>」と述べたことはたいへん印象的である。

では、この研究所において、“マルクス主義的”とはどのようなものを想定していたのであろうか。科学史の分野については統一した視角にもとづく方法論上の道標は特定できないが、技術史については、幸い、マルクス主義技術論の道標となったとされるガルベルの講演録・論稿は今日でも参照が可能である。これらの検討は本稿の次の課題となるであろう。

## 注

- 1) *О.Д. Симоненко*, «История техники и технических наук: Философско-методологический анализ эволюции дисциплины». Москва: Институт истории естествознания и техники РАН, 2005. С.23; この著書の当該部分については邦訳がある（*О.Д.シモネンコ*／市川 浩訳『技術史と工学史—学術発展の哲学的・方法論的分析—』ロシア科学アカデミー・エス・イー・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所, 2005年。から「まえがき」と第1章「技術史の歴史」, 日本科学史学会『技術史』

第8号、2011年、23～45ページ、引用はこの36ページから。ただし、表現を一部変えている）。

2) 本稿が対象とする1930年代、日本でマルクス主義技術論の形成・発展に圧倒的な影響力をもっていたのは1932年に設立された「唯物論研究会」であることに誰しも異論はないであろう。「唯物論研究会」は早くから“技術の問題”に取り組んだ（戸坂潤『技術の哲学』は1934年に時潮社から出版されている）が、建国後まだ20年も経過していなかった新しい国ソ連に関する関心は高かったものの（同会発行の機関誌『唯物論研究』【筆者は青木書店による復刻版—全19巻、1972～1975年刊—を参照した】創刊号には岡邦雄「科学と技術の計画的結合」—48～66ページ—が掲載され、第4号からはときおり短信欄に「ソヴェート・ニュース」、あるいは「ソヴェート科学ニュース」が登場するなど）、ソ連における技術史・技術論の紹介はほとんど見られない（1935年2月刊行の『唯物論研究』第28号掲載の戸坂・岡・岸「技術に関する文献」—横組1～16ページ—では、政治文献・マルクス主義の解説を除くと、その「B. 技術の歴史」にニコライ・ヴォルコフのものが挙げられている（横組9ページ）くらいであり、続く第29号（横組1～8ページ）、30号（同じく1～7ページ）に掲載された岡らによる「サヴェート技術文献（一）、（二）」には工学書・経済書のみが挙げられている）。“屈指のロシア語の使い手”＝岡邦雄が同誌上で技術論に取り組むのは、1937年の第57号（19～27ページ）、58号（142～148ページ）の「技術史について（上）、（下）」からであり、そこで岡はヴィクトル・ダニレフスキー（Виктор Васильевич Данилевский. 1898-1960）の仕事に論及している（これが、いわゆる「軍事技術論争」を誘発することになる。さしあたり、中村静治『新版・技術論論争史』創風社、1995年、47～49ページ参照）。つまり、ソ連の技術史・技術論は日本人にとって、最初からダニレフスキー（そして、遅れて戦後にアナトーリー・ズヴォルィキン—Анатолий Алексеевич Зворыкин. 1901-1988—）だったことになる。

- 3) ここでのヴァシーリエフにたいする評価はアレクサンドル・ドミートリエフによっている (A.H. Дмитриев, “Институт истории науки и техники в 1932-1936 гг.” «Вопросы истории естествознания и техники». 2002. № 1. С. 21)。ヴァシーリエフは、本稿の考察の対象となるソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所が発行していた学術誌『科学史=技術史アーカイヴ』(«Архив истории науки и техники»)誌に「エミール・マイエルソンの科学理論」(Вып. V. С. 57-100), 「原則的被観測性原理の問題に寄せて」(Вып. VI. С. 1-32), 「カントにおける物質の理論と古典力学の根拠」(Вып. VII. С. 1-66), 「科学理論発展の若干の特徴—エンゲルス没後40周年に寄せて—」(Вып. VIII. С. 1-28)を發表している。しかしながら、この時期のソ連における新しい物理学とマルクス主義哲学との複雑で、緊張に満ちた交差を扱った、わが国ソヴィエト科学史研究における一大労作、金山浩司の『神なき国の科学思想—ソヴィエト連邦における物理学哲学論争—』(東海大学出版部, 2018)にも彼の名前は登場しない(同書233ページの注12に登場するヴァシーリエフなる人物は別人である。ただし、この研究所の研究者であったザハール・ツェイトリンは同書に頻出している—114, 115ページなど)。ドミートリエフは彼の機械論的傾向と新しい物理学への反感を指摘している— Дмитриев, Указ. статья в примечании 3, С. 18—)。
- 4) Дмитриев, Указ. статья в примечании 3), С. 3-36.
- 5) Ю.И. Кривоносов, “Институт истории науки и техники: тридцатые—громовые, роковые...”. «Вопросы истории естествознания и техники». 2002. № 1. С. 42-75.
- 6) シモネンコ, 前掲邦訳(注1), 35, 36ページ。
- 7) コンスタンチン・アレクサンドロヴィチ・トミーリン/金山浩司訳「第三部第3章 セルゲイ・ヴァヴィーロフと1930年代ソ連科学アカデミーの組織的転換」, 市川浩編『科学の参謀本部—ロシア/ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究—』北海道大学出版会, 2016年, 193-195

ページ。

- 8) 後年の「大テロル」期と違い、この時期、スターリンの政敵打倒はそれなりにプロセスを踏んでいた。“右翼反対派”ブハーリンはまず1929年4月の党中央委員会・中央統制委員会合同総会、第16回党協議会において、政治局内には留まったものの、“責任ある部署から解任され”，つづいて11月の中央委員会総会で政治局から解任された（ソ連邦共産党史翻訳委員会訳『ソ連邦共産党史 2』大月書店，1972年，609，610ページ）。
- 9) Архив Российской Академии наук (далее- АРАН), “Историческая справка” к Фонду, №154 (Институт истории науки и техники Академии наук СССР). С.2.
- 10) Там же.
- 11) М.А. Гуковский, “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук (на 1 января 1933г.)”. «Архив истории науки и техники» Вып. I, С. 226, 227.
- 12) 広く知られていることであるが，第2回科学史国際会議（ロンドン）におけるソ連からの参加者たちの発表はさまざまな国からの参加者に衝撃を与えた。彼らの発表は英語で出版され（Nikolai Bukharin ed., *Science at the Crossroads: Papers from The Second International Congress of the History of Science and Technology*. 1931），日本語にも翻訳された（唯物論研究会訳編『岐路に立つ自然科学』大畑書店，1934年）。とりわけ，ボリス・ゲッセンによる報告「ニュートン『プリンシピア』の社会的経済的根源」（B. Hessen, “The Social and Economic Roots of Newton's «Pricipia».”）はマルクス主義の科学史，あるいはより広く“エクスターナルな”科学史のもっとも重要な古典となっている（これには新しい邦訳がある：ベー・ム・ゲッセン／秋間実他訳『ニュートン力学の形成－「プリンシピア」の社会的経済的根源－』法政大学出版局，1986年）。
- 13) Гуковский, Указ. в примечании 11), С.227.

- 14) *Кривоносов*, Указ. статья в примечании 5), С.59.
- 15) *С.Н. Корсаков*, “Краткий очерк научной, научно-организационной и общественно-политической деятельности”. Российская Академия наук, «Абрам Моисеевич Деборин: Биобиблиография ученых, Философия вып.6» (составитель – С.Н. Корсаков). Москва: Наука, 2013. С.22-25. (邦訳がある：セルゲイ・コルサコフ／市川浩訳「アブラム・モイセーヴィチ・デボーリン—再評価のための伝記的考察—」, 中部大学『アリーナ』第22号, 2019年, 208-212ページ参照)。
- 16) *Кривоносов*, Указ. статья в примечании 5), С.52.
- 17) *Дмитриев*, Указ. статья в примечании 3), С.6,7.
- 18) АРАН, Фонд (далее-Ф.) 154, Опись (далее-Оп.) 2, Дело (далее-Д.) 14, л.1.
- 19) *Дмитриев*, Указ. статья в примечании 3), С.5.
- 20) *Кривоносов*, Указ. статья в примечании 5), С.56.
- 21) 哲学, および生物学の分野をおもな対象とするものではあるが, 藤岡毅の労作『ルィセンコ主義はなぜ出現したか—生物学の弁証法化の成果と課題—』(学術出版会, 2010年)はその80~150ページで「文化革命」の経緯, その影響と破綻を活写している。
- 22) 「シャフトイ事件」とその政治史的文脈については, 中嶋毅の優れた研究がある(中嶋毅『テクノクラートと革命権力—ソヴィエト技術政策史 1917-1929—』岩波書店, 1999年)。
- 23) *Дмитриев*, Указ. статья в примечании 3), С.8.
- 24) ニコライ・ヴァヴィーロフの研究上の業績, ルィセンコ主義との格闘の帰趨については, さしあたり, 藤岡, 前掲書(注21)の46, 47, 130, 162, 163, 168, 169, 182ページなどを参照のこと。
- 25) *Гуковский*, Указ. в примечании 11), С.228: なお, “旧専門家”ながら, 電化事業を通じてソヴィエト政権と良好な関係を築いたミトケーヴィチは, 20世紀の新しい物理学の潮流に反対してさかんに発言した(さしあ

たり、金山、前掲書、102-104ページを参照のこと)。また、ケレルは機械論的偏向をもつラマルキストとして、遺伝学に反対した(藤岡、前掲書-注21-, 168ページ)。

26) *Гуковский*, Указ. в примечании 11), С.231.

27) Там же, С.228.

28) Там же, С.229.

29) *М.А. Гуковский*, “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук в 1933г.” «Архив истории науки и техники» Вып. III: С. 337, 338.

30) 「言語は上部構造」と規定し、西欧言語学=印欧祖語派を激しく批判したマルは、その死後、スターリン自身が執筆し、党機関紙『プラウダ』紙上に発表された論文「言語学におけるマルクス主義について」(*И.В. Сталин*, “Относительно марксизма в языкознании.” «Правда» 20 июня 1950) で、その“ドグマティズム”が激しく批判された。この、いわゆる「言語学論争」は、スターリンその人が大論文を執筆して介入したという点で異色のものであった。ルネ・ザパタ(原田佳彦訳『ロシア・ソヴィエト哲学史』白水社、1997年-フランス語原書は1988年の出版-)は、言語学論争へのスターリンの介入を、スターリン、およびその政権のサイバネティクスや情報科学を擁護する姿勢に求めている(同書、136ページ)が、この解釈には無理がある。スターリン生前には「サイバネティクス」や「情報科学」が政権指導部に知られることはなかった。「サイバネティクス」普及は、言語学論争のあと、脱スターリン化期に社会の合理的改革をめざす科学者たちによって〈下から〉の社会運動として展開され、やがて政権要路の支持をえて、党・国家の政策に取り入れられていった。権力による「サイバネティクス」受容は、今度は逆に科学者たちの失望を招き、彼らの心は体制から離れていった。この過程については、スラヴァ・ゲローヴィッチ氏の名著(*Slava Gerovitch, From Newspeak to Cyberspeak: A History of Soviet Cybernetics. The MIT Press, 2002*)に詳しい。「言語学論争」へのスターリンの介入については、

ジョージア人言語学者アルノリト・チコバーヴァ (Арнольд Степанович Чикобава. 1898-1985) という“黒子”の果たした役割を看過することはできないものの、スターリン自身が哲学問題では相当の主体性を持ち、いわゆる“ゴースト・ライター”も、特定の“助言者”や“顧問”ももたず、原稿をみずから草稿から練り上げていたことは今日広く知られている。帝政ロシアに奪われた高等教育就学機会へのルサンチマン、みずから後継を自負した“先達”レーニンが放つ輝かしい“知の権威”にたいする強烈なコンプレックス、こうしたものがスターリンをみずからに替わりうる“知の権威”狩りに追い込んでゆく。ポロックの労作 (Ethan Pollock, *Stalin and the Soviet Science Wars*. Princeton University Press, 2006) は後期スターリン期における彼の“知の権威”追求を描いていて興味深い。なお、マルの“物質文化史”への関わりについては今後の課題としたい。

- 31) *Гуковский*, Указ. в примечании 29) (Вып. III), С.339, 340.
- 32) Там же, С.340, 341.
- 33) Там же, С.342.
- 34) Там же, С.2339, 340.
- 35) *Дмитриев*, Указ. статья в примечании 3), С.17.
- 36) *М.А. Гуковский*, “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук в 1934г.” «Архив истории науки и техники» Вып. V, С.611.
- 37) *Дмитриев*, Указ. статья в примечании 3), С.13.
- 38) ショウジョウバエにエックス線を照射して突然変異をおこさせる実験で、遺伝子の可変性と放射線の遺伝への影響を証明した研究で有名なマラーは共産主義に共鳴していたこともあって、1933年にソ連に移り遺伝学研究を行っていたが、ルイセンコ主義の台頭と遺伝学者への迫害を前にソ連に失望し、1937年にソ連を去った (藤岡, 前掲書—注21—, 74ページ)。
- 39) *М.А. Гуковский*, “Хроника: Институт истории науки и техники Академии

- наук СССР в 1935г.” «Архив истории науки и техники» Вып. VIII, С.477.
- 40) Там же, С.474.
- 41) Институт истории материальной культуры Российской Академии наукのホーム・ページ (<http://www.archeo.ru/>. 2019年11月28日閲覧)。
- 42) *М.А. Гуковский*, “Хроника: История техники в научных учреждениях Ленинграда.” «Архив истории науки и техники» Вып. II, С.337.
- 43) Там же, С.337, 338.
- 44) АРАН, Ф.154, Оп. 2а, Д.10а, л.11: *ダニレフスキーの評価と、いささか厄介なその人となりについては*, *В.Л. Гвоздецкий*, “Ученый и время: К 100-летию со дня рождения В.В. Данилевского”. «Вопросы истории естествознания и техники». 2000. № 1. С.112-125 (邦訳がある: *В.Л. Гвоздецкий* / 市川 浩訳 「学者と時代— В.В.ダニレフスキー生誕100周年に寄せて—」, 日本科学史学会技術史分科会『技術史』第2号, 2002年, 30~45ページ), また, 市川浩「【随想】ダニレフスキー雑感」(『イル・サジアトール』第36号, 2007年, 64-68ページ)を参照のこと。
- 45) *Дмитриев*, Указ. статья в примечании 3), С.14.
- 46) Институт истории материальной культуры Российской Академии наукのホーム・ページ (注41初出)。1991年になって, 同研究所のСанкт=Петербург支那が独立した研究所となり, 「物質文化史研究所」を名乗るようになった。
- 47) *М.А. Гуковский*, Указ. в примечании 11), С.226,227.
- 48) *А.А. Радциг*, «Джемс Уатт и изобретение паровой машины». Пг,НХТИ, 1924, 106сс.
- 49) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.2, лл.6,7: “垂直的な切り口”, “水平的な切り口”が意味するものは, 前後の文脈から, 前者が技術に内在する発展方向を謂うのに対して, 後者が社会などの技術そのものにとって外在的な要因との関係に根拠づけられた発展方向を指していると考えられる。ここで, ブハーリンは, 技術そのものの内在的な論理から導き出される技術進歩

は、“遊牧民の仮小屋”の発展史程度の、ごく些細なことであろうとして、その意義を否定的に評価し、“水平的な切り口”，すなわち社会と技術の相互作用を重視する見方の重要性を示しているのである。

50) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.2, лл.96-139.

51) *Гуковский*, Указ. в примечании 29) (Вып. III), С.338.

52) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.27, лл.1-26：なお，ガルベルは1934年3月からこの研究所と並行してレニングラード工業専門学校（Ленинградский индустриальный институт）に哲学担当の教授として勤務している（АРАН, Ф.411, Оп. 6, Д. 621, лл.3, 7）。

53) *Х.И. Гарбер*, “Проблема Maschinerie у Маркса”. «Архив истории науки и техники» Вып. V, С. 1-56.

54) АРАН, Ф.154, Оп. 1, Д.1, л.60.

55) 現代の歴史研究の到達点に立てば、「大テロル」の要因はいささかも単純化を赦さない。ウェンディ・ゴールドマンは「一部の歴史家はテロルを，国家が厳重に統制し，個別のカテゴリーの犠牲者を対象とした『切除の暴力』の一形態と概念化する。しかし，テロルをより混乱させ，制御不能の事態としたのは，大衆参加や非難，権威への攻撃であった」と述べている（ウェンディ・ゴールドマン／立石洋子訳「5 テロルと民主主義」，松井康浩・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀2 スターリニズムという文明』岩波書店，2017年，163ページ）。あたかもわが国の「普通選挙法」と「治安維持法」が“抱き合わせ”であったように，元貴族，白軍，元富農にも平等に投票権を与え，直接・秘密投票を約束した，“民主的な”1936年の「スターリン憲法」（スターリンその人は選挙を通じた幹部の総入れ替えを期待していたとされる）の本格施行を前に，スターリン権力は，少なくとも客観的には，農業集団化，社会主義工業化の強行のなかで蓄積された一般住民の不満に対して“屈折した”捌け口（スケープ・ゴート）を準備しなければならなかった。しかし，一般民衆の不満はあまりに大きく，権力の側でも制御不能になってゆく（同

書147-174ページ)。他方、権力への民衆の手紙を緒にソヴィエト国家の本質に迫ろうとしたアレクサンドル・リフシン (Александр Яковлевич Лившин), イーゴリ・オルロフ (Игорь Борисович Орлов) らは、国際環境の悪化がもたらす住民の心理の変化にも着目する (A.Я.Лившин, И.Б. Орлов., О.В. Хлевнюк, «Письма во власть. 1928-1939. Заявления, жалобы, доносы, письма в государственные структуры и советским вождям». М.:РОССПЭН, 2002)。ナチス=ドイツの軍備大拡張と東方への衝動 (1936年にはラインラントに進駐), 帝国日本の中国大陸進出 (蘆溝橋事件は1937年) が進み, 日独「防共協定」が締結され (1936年), スペイン内戦において左派が敗北した (1937年)。こうしたソ連を取り巻く国際環境の悪化を背景とするゼノフォビアの拡大と, それにソ連国家の複雑な多民族構成が絡み合い, 住民のなかに相互に対する疑心暗鬼が高まり, 一種のマス・ヒステリア状態が醸成されたと考えられる。もはや古典に属するジュゼッペ・ボッファの『ソ連邦史』もこうした“外圧”の影響を重視している (G.ボッファ/坂井信義・大久保昭男訳『ソ連邦史 2 - 1927~1941 -』大月書店, 1980年, 175-194ページ)。また, 1937年に内務人民委員に就任したニコライ・エジョフ (Николай Иванович Ежов. 1895-1940) を典型とする, 内務官僚らのスターリンへの忠誠心に発する過度の付度, さらに広い範囲における, 上位のものの排除をみずから出世の機会ととらえる傾向が被害を極大化したとも言えよう (ゴールドマン, 前掲, 151-153, 167-169ページ)。

56) Кривоносов, Указ. статья в примечании 5), С.56.

57) Там же, С.59 : ゴルブノーフのこのような無思慮, 短絡, 粗暴が科学者の反感を呼び, 彼自身の墓穴を掘る結果となっていたとも考えられる (金山浩司「第三部第4章 大テロルはソ連邦科学アカデミーをどう変えたか—常任書記の解任を手がかりに」, 市川編, 前掲書—注7—, 199-214ページ)。ゴルブノーフは1938年2月19日に逮捕され, 9月7日に銃殺されている (同, 208ページ)。

- 58) АРАН, “Историческая справка” к Фонду, №154. Указ. в примечании 7) С.4.
- 59) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.55, л.9.
- 60) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.52, л.7.
- 61) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.55, лл.1,2.
- 62) 市川 浩「ヴィクトル・ダニレフスキー（1898-1960年）再考－“正統”マルクス主義的技術史の背景－」『イル・サジアトーレ』第47号（2020年）所収予定.
- 63) АРАН, Ф.154, Оп. 1, Д.21, л.25.
- 64) 1929年11月, 全連邦共産党（ボ）中央委員会は, 「文化革命」の一環として, 大学から数学といくつかの自然科学の分科を除いた他の学部を切り離し, 独立の高等専門学校に切り替える方針を採択した。社会主義建設に必要な専門家速成の方法として導入された“突撃隊方式”が, 勤労者学部から大学院にいたるまで, すべての大学教育の段階で学習時間を減らし, アカデミック・スタンダードの引き下げと卒業生の質の低下をもたらしていた。このため, ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国教育人民委員部は, 人民委員アンドレイ・ブーブノフ（Андрей Сергеевич Бубнов. 1884-1938）のもと, 早くも1931年7月には是正に乗り出す（Народный комиссариат просвещения РСФСР, «Государственные университеты». Москва, Огиз-изогиз, 1934. С.18；市川浩「第V部第1章 科学アカデミーの戦時疎開一格差と確執」, 市川編, 前掲書－注7－, 359, 360ページ参照）。
- 65) АРАН, Ф.154, Оп. 1, Д.34, л.8.
- 66) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.21, л.121.
- 67) АРАН, Ф.154, Оп. 1, Д.99, л.11.
- 68) Сайт: «Открытый список» (<https://ru.openlist.wiki/>), Хаим Иосифович Гарбер項（2019年11月28日閲覧）：ガルベルの党員としての調書はロシア国立社会=政治史文書館（ヨシカル=オラ保管庫）に保管されている

- (Российский государственный архив социально-политической истории –РГАСПИ–, Ф. 17, Оп.100, Дело 133559)。
- 69) Сайт: «Открытый список» (<https://ru.openlist.wiki/>) Сергей Фёдорович Васильев項 (2019年11月28日閲覧)。
- 70) *Кривоносов*, Указ. статья в примечании 5), С.56.
- 71) ロシア語版 *Wikipedia* (<https://ru.wikipedia.org/wiki/>) : Матвей Александрович Гуковский項 (2019年11月28日閲覧)。
- 72) ロシア語版 *Wikipedia* (<https://ru.wikipedia.org/wiki/>) : Николай Иванович Бухарин項 (2019年11月28日閲覧)。
- 73) *Кривоносов*, Указ. статья в примечании 5), С.64: Электронная библиотека «НАУКА ПРАВА»のValentin Valerianovich Obolenский項 (<https://naukaprava.ru/catalog/435/1381/4257>. 2019年11月28日閲覧)によれば, 逮捕は1937年10月14日, 銃殺は翌年の9月1日であった。
- 74) *Кривоносов*, Указ. статья в примечании 5), С.65, 66.
- 75) 彼の1937年2月9日付, ゴルブノーフ宛上申書が残されている (АРАН, Ф.411, Оп. 6, Д. 621, лл.17, 18)。
- 76) «Архив истории науки и техники» Вып. I–IXは回収・廃棄の措置がとられたため, 目にすることはそれほど容易ではない。全巻はロシア国立図書館 (Российская государственная библиотека: РГБ : もとのレーニン図書館) に所蔵 (非電子化カタログにより) されているが, ほかにわが国の東北大学図書館が第5巻と第9巻を除く7冊を所蔵している。その図書館が貼付したラベルから, これらは東北帝国大学工学部教官の誰かが同時代に輸入していたものと推測される。
- 77) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д.2, л.91.

【附記】本稿においては, 重要な人名の初出箇所, 名前の原綴りと生没年をわかる範囲で表記した。しかし, 書名などについては, 煩雑さを避けるため, タイトルがロシア語の人名である場合を除き, 多くの場合邦語の

みで記している。

本稿は、2019～2022年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）「マルクス主義技術論の源流－ハイム・ガルベル（1903～1936年）とその周辺－」〔研究代表者－市川 浩：課題番号19K00271A〕による研究成果の一部である。